

思春期のタイミングと早熟・晩熟の影響

Pubertal timing and the Impact of Early or Late Maturation

山本 ちか
Chika YAMAMOTO

本研究は、日本の中学生を対象として思春期的変化の時期と早熟や晩熟が中学生の心理的特徴、行動的特徴にどのような影響を与えるのかを検討することが目的である。本研究では、思春期的変化の指標として、男子は精通現象、女子は初潮をとりあげた。思春期のタイミングが他の中学生よりも早い中学生を早熟群、遅い中学生を晩熟群、多くの中学生が思春期的変化を経験する時期に変化が起こった中学生を中間群とし、群ごとに外見についての意識や行動、抑うつや自己評価、問題行動の程度が異なるかを検討した。その結果、思春期的変化は、男女とも外見への意識に変化を与え、男子の早熟は外的な問題行動と、抑うつなどの内的な問題行動の両方に影響を与え、女子の早熟は内的な問題行動に影響を与えている可能性が示唆された。

The purpose of this study was to examine the pubertal timing and the impact of early or late maturation for junior high school students in Japan. Timings of puberty were assessed the first ejaculation for male and the menarche for female. This study examined whether the degree of consciousness and actions about the appearance, depressive symptoms, self-evaluations, and externalizing problem behaviors were different, by timings of puberty. The results suggested that the puberty changed consciousness to appearance for male and female, the early maturation impacted depressive symptoms and externalizing problem behaviors for male, the early maturation for female impacted depressive symptoms.

キーワード：思春期のタイミング、早熟、晩熟、中学生
pubertal timing, early maturation, late maturation, junior high school students

【目的】

思春期になると、さまざまな身体的変化が現れる。こうした思春期的変化が青年に与える影響には、どのような心理的特徴、行動的特徴があるのだろうか。早熟の中学生と晩熟の中学生でどのような違いがみられるのだろうか。

従来多くの研究で、思春期的変化が起こるタイミングと、心理社会的な発達との関連について検討がなさ

れてきた。思春期的変化が起こる時期が、他の青年よりも早い青年を早熟群、遅い青年を晩熟群として、抑うつ傾向、自尊感情、ボディイメージ、仲間との関係、学校の成績、問題行動などの心理社会的特徴がどのように異なるのかが検討されてきた。

こうした研究でみられる思春期的変化のタイミングによる心理的影響は、男女で異なることが指摘されてきた。Jones, M.C. や Mussen, P.H. らによる研究で

は (Jones & Mussen, 1958¹⁾; Mussen & Jones, 1957²⁾ など), 男子の場合は晩熟の青年, 女子の場合は早熟の青年が, ネガティブな自己像を持ちやすく, また適応上の問題が生じやすいなど, 男女で思春期的変化のタイミングによる影響が異なることが指摘されている。

他の研究においても, 男子の場合, 心理的特徴としては, 早熟の男子は晩熟の男子よりも肯定的な自己像をもち, 自尊感情が高いということ, 仲間から人気があるのは早熟者であることが指摘されている (Richards & Larson, 1993³⁾ など)。しかし早熟の男子は, 自分自身に自信があるがゆえに, 行動面においては, 飲酒, 喫煙, 学校のずる休みなどの問題行動を起こす危険性が高く, 早くから性的行動を行う傾向がみられることが示唆されてきた (Duncan, Ritter, Dornbusch, Gross, & Calsmith, 1985⁴⁾; Andersson & Magnusson, 1990⁵⁾; Wichstrom, 2001⁶⁾ など)。

一方女子は, 早熟者は, 自尊感情が低い, 抑うつや不安の程度が高い, 社交性が低い, ネガティブなボディイメージを持つということが指摘されている (Simmons & Blyth, 1987⁷⁾; Ge ら, 2003⁸⁾; Jones, & Mussen, 1958¹⁾ など)。また早熟の女子は, 男子と同様に問題行動を起こす危険性が高いことも示されており, 女子にとって早熟は適応のリスクがあることが指摘されている (Dick, Rose, Pulkkinen, Kaprio, 2000⁹⁾; Wichstrom, 2001⁶⁾ など)。

しかしこれらの研究の大部分は欧米での研究から得られた知見であり, 日本ではこうした早熟者と晩熟者の心理的, 行動的特徴の相違を検討した実証的研究はあまりみられない。

そこで本研究では, 日本の中学生を対象として, 早熟の中学生と晩熟の中学生にどのような心理的特徴, 行動的特徴がみられるのかを比較検討し, その特徴は男女でどのように異なるのかを検討することを目的とする。まず中学2年生5月の時点で, 思春期的変化がすでに起こっているのか, 起こっているのであれば, 変化はいつであったのかを検討する。思春期的変化の指標としては, 従来の研究では, 初潮・精通現象の有無やその時期, 乳房の発達 (女子), 声がわり (男子), 恥毛の発現の程度などさまざまな要因がとりあげられているが, 本研究では男子は精通現象, 女子は初潮をとりあげる。この思春期的変化の時期が他の中学生よりも早い中学生を早熟群, 遅い中学生を晩熟群, 多くの中学生が思春期的変化を経験する時期に変化が起こった中学生を中間群と分類する。そして中学2年の

1学期 (5月) での男女それぞれの早熟者と晩熟者の心理的, 行動的特徴の傾向を比較検討する。まず, 外見についての意識や行動をとりあげ, 中学生が外見についてどのような意識をもち行動をしているのか, 早熟者と晩熟者で, 外見を気にする程度や外見についての様々な行動に違いがみられるのかどうかについて検討する。次に心理的特徴として, 抑うつ傾向と自己評価をとりあげ, 早熟者と晩熟者の違いを検討する。自己評価については, 自分自身全体をどれだけ肯定的に評価しているのかどうかについての全体的自己価値と, 身体的外見・スポーツ能力・知的能力の3側面の具体的側面の自己評価について検討する。また青年の行動上の特徴として, 規則違反やさまざまな問題行動についてもとりあげ, 早熟者と晩熟者の相違を明らかにする。

【方法】

1. 調査内容

①思春期的変化の時期: 男子については, 初めての射精がいつであったのかを「小学1年生」～「中学2年生」, 「まだ」, 「覚えていない, わからない」でたずねた。女子については, 初潮がいつであったのかを「小学1年生」～「中学2年生」, 「まだ」, 「覚えていない, わからない」でたずねた。

②身長: 中学2年生5月の時点での身長をたずねた (cm)。

③体重: 中学2年生5月の時点での体重をたずねた (kg)。

④BMI: 体重 (kg) / (身長 (m) × 身長 (m)) で算出した。

⑤外見についての意識や行動

a. 外見を気にする程度: 太っていること, 身長が低いことなど, 自分の外見をどれだけ気にしているかを6段階評定 (非常に気にしている～非常に気にしていない) でたずねた (6項目)。

b. 容姿に関する意識や行動: 「ダイエットをしたことがある」, 「ダイエットに興味がある」, 「一日になんども鏡を見る」など容姿に関する行動を実際に行っているか, 容姿に関する行動に興味があるかを6段階評定 (非常にあてはまる～非常にあてはまらない) でたずねた (9項目)。

⑥抑うつ傾向

a. 抑うつ気分: 「悲しいと感じる」, 「ゆううつだと感じる」などの抑うつ気分がこの3ヶ月間にどれだけ

あったかを6段階評定(いつもある～めったにない)でたずねた(22項目)。

- b. 身体的変調および生活リズムの変調:「頭痛がある」, 「吐き気がある」, 「眠れない」, 「食べ物があまり食べられない」などの抑うつ状態を示す身体的変調がこの3ヶ月間にどれだけあったかを6段階評定(いつもある～めったにない)でたずねた(14項目)。

⑦自己評価

- a. 全体的自己価値:「今の自分が好きである」, 「時々自分がだめな人間だと思う」など自分自身全体をどのように評価しているのかを6段階評定(非常にあてはまる～非常にあてはまらない)でたずねた(5項目)。

- b. 具体的側面の自己評価:身体的外見, スポーツ能力, 知的能力について, どのように評価しているのかを6段階評定(非常にあてはまる～非常にあてはまらない)でたずねた(13項目)。

- ⑧規則違反:「制服の形を崩して着ている」などの規則違反がこの3ヶ月間にどのくらいあったかを6段階評定(いつもある～めったにない)でたずねた(7項目)。

- ⑨問題行動:盗み(5項目), 攻撃行動(7項目), 破壊行動(1項目), 喫煙・飲酒・薬物(3項目), 性的行動(5項目)といった問題行動をこの3ヶ月間にどのくらい行ったかを4段階評定(何度もあった, 数回あった, 一度だけあった, 一度もなかった)でたずねた。

2. 調査実施時期と調査協力者

調査は中学2年生の1学期(2003年5月下旬)に, 愛知県内の9校の中学生と福島県内の4校の中学生に実施した。調査の依頼は学校を通して行い, 自宅に持ち帰って回答するよう依頼した。回答後, 質問紙を封筒に入れ密封して, クラス担任に提出させた。なお,

調査に際し, 調査は強制ではないこと, 記入しなくてもよいこと, 個人の回答内容が第三者に知られることや研究目的以外で使われることはないことを保護者あての文書で説明し, 調査用紙に明記した。

調査用紙の配布数は, 2477名(愛知県1440名, 福島県1037名)であった。そのうち, 回答し返送があったのは, 1225名(愛知県771名, 福島県454名)であった。回収率は愛知県が53.54%, 福島県が43.78%であった。

今回の分析は, 「思春期的変化の時期がいつであったか」に回答のあった1003名(愛知県男子309名, 愛知県女子353名, 福島県男子140名, 福島県女子201名)についておこなった。

【結果】

1. 思春期的変化の時期

男子については, 初めての射精がいつであったのかをたずねたが, 半数以上(53.7%)が「覚えていない・わからない」という回答であり, 「まだ」という回答が23.8%であった。中学1年生という回答が最も多く(11.4%), ついで小学6年生(5.6%)という回答であった(Table1)。

女子については, 初潮がいつであったのかをたずねたが, 小学6年生という回答が28.3%で最も多く, ついで中学1年生が18.8%, 小学5年生が16.6%であった。「まだ」という回答は11.0%であった。男子では回答の多かった「覚えていない・わからない」は, 女子では19.5%のみであった(Table1)。

また愛知県と福島県の地域差について検討したところ, 男子は中学2年5月までに初めての射精がみられたのは, 愛知県が45.1%, 福島県が56.1%であった(Table2)。女子は, 中学2年5月までに初潮がみられたのは, 愛知県が82.6%, 福島県が92.7%であった(Table3)。男女とも福島県の中学生の方が愛知県の中

Table1 思春期的変化の時期

		小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	まだ	わからない	合計
男子	人数	3	0	0	2	7	25	51	13	107	241	449
	(%)	(0.7)	(0.0)	(0.0)	(0.4)	(1.6)	(5.6)	(11.4)	(2.9)	(23.8)	(53.7)	(100.0)
女子	人数	1	0	1	21	92	157	104	9	61	108	554
	(%)	(0.2)	(0.0)	(0.2)	(3.8)	(16.6)	(28.3)	(18.8)	(1.6)	(11.0)	(19.5)	(100.0)

Table2 地域別の思春期的変化の時期（男子）

	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	まだ	合計
人数	2	0	0	2	4	15	32	9	78	142
愛知 (%)	(1.4)	(0.0)	(0.0)	(1.4)	(2.8)	(10.6)	(22.5)	(6.3)	(54.9)	(100.0)
(累積%)	(1.4)	(0.0)	(0.0)	(2.8)	(5.6)	(16.2)	(38.7)	(45.1)	(100.0)	
人数	1	0	0	0	3	10	19	4	29	66
福島 (%)	(1.5)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(4.5)	(15.2)	(28.8)	(6.1)	(43.9)	(100.0)
(累積%)	(1.5)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(6.1)	(21.2)	(50.0)	(56.1)	(100.0)	
人数	3	0	0	2	7	25	51	13	107	208
合計 (%)	(1.4)	(0.0)	(0.0)	(1.0)	(3.4)	(12.0)	(24.5)	(6.3)	(51.4)	(100.0)
(累積%)	(1.4)	(0.0)	(0.0)	(2.4)	(5.8)	(17.8)	(42.3)	(48.6)	(100.0)	

Table3 地域別の思春期的変化の時期（女子）

	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	まだ	合計
人数	1	0	1	16	48	89	71	6	49	281
愛知 (%)	(0.4)	(0.0)	(0.4)	(5.7)	(17.1)	(31.7)	(25.3)	(2.1)	(17.4)	(100.0)
(累積%)	(0.4)	(0.0)	(0.7)	(6.4)	(23.5)	(55.2)	(80.4)	(82.6)	(100.0)	
人数	0	0	0	5	44	68	33	3	12	165
福島 (%)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(3.0)	(26.7)	(41.2)	(20.0)	(1.8)	(7.3)	(100.0)
(累積%)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(3.0)	(29.7)	(70.9)	(90.9)	(92.7)	(100.0)	
人数	1	0	1	21	92	157	104	9	61	446
合計 (%)	(0.2)	(0.0)	(0.2)	(4.7)	(20.6)	(35.2)	(23.3)	(2.0)	(13.7)	(100.0)
(累積%)	(0.2)	(0.0)	(0.4)	(5.2)	(25.8)	(61.0)	(84.3)	(86.3)	(100.0)	

学生よりも思春期的変化の時期が早いようである。この傾向は、47都道府県別に女子の初潮の時期を調査した日野林ら(2004)¹⁰⁾の結果と一致している。

2. 早熟群と晩熟群の分類

男女それぞれ、早熟群と晩熟群に分類した。まず男子については、「覚えていない・わからない」と回答のあったものを除くと、「まだ」という回答が半数以上であったため、「まだ」の回答を晩熟群とし、小学1年生～小学6年生までを早熟群、中学1年生と中学2年生を中間群とした(Table4)。女子については、中学1年生・中学2年生と「まだ」という回答を晩熟群とし、小学1年生～小学5年生までを早熟群とし、小学6年生を中間群とした(Table5)。

男女それぞれ、早熟群・中間群・晩熟群ごとの身長、体重、BMIの平均値および標準偏差を算出し、一要因の分散分析を行った(Table6,7)。その結果、男女と

も、早熟群と晩熟群の間に有意差がみられた。なお、愛知県と福島県それぞれについて分析を行ったが、結果に大きな違いがみられなかったため、両県込みで分析を行った結果を示した。

3. 早熟者・晩熟者の特徴

早熟者と晩熟者の心理的な特徴、行動的な特徴を明らかにするために、外見に関して「外見を気にする程度」、「容姿に関する行動」、心理的特徴に関して「抑うつ傾向」「全体的自己価値」「具体的側面の自己評価」、行動上の特徴として「規則違反」「問題行動」について、早熟群、中間群、晩熟群ごとに平均値、標準偏差を算出し、一要因の分散分析を行った。

(1) 外見についての意識や行動

分散分析の結果、有意差がみられた項目の平均値、標準偏差および分散分析の結果をTable8・9に示した。

Table4 早熟群, 中間群, 晩熟群の人数 (男子)

	愛知県		福島県		合計	
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
早熟群	23	(11.1)	14	(6.7)	37	(17.8)
中間群	41	(19.7)	23	(11.1)	64	(30.8)
晩熟群	78	(37.5)	29	(13.9)	107	(51.4)
合計	142	(68.3)	66	(31.7)	208	(100.0)

Table5 早熟群, 中間群, 晩熟群の人数 (女子)

	愛知県		福島県		合計	
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
早熟群	66	(14.8)	49	(11.0)	115	(25.8)
中間群	89	(20.0)	68	(15.2)	157	(35.2)
晩熟群	126	(28.3)	48	(10.8)	174	(39.0)
合計	281	(63.0)	165	(37.0)	446	(100.0)

Table6 身長, 体重, BMI の平均値, 標準偏差および分散分析の結果 (男子)

	早熟群		中間群		晩熟群		
	平均	(SD)	平均	(SD)	平均	(SD)	
身長(cm)	163.21	(7.51)	160.84	(5.80)	156.68	(9.47)	晩熟<中間=早熟***
体重(kg)	54.17	(9.63)	50.43	(8.81)	44.78	(9.69)	晩熟<中間=早熟***
BMI	20.27	(2.96)	19.31	(2.98)	18.12	(2.76)	晩熟<早熟***

***: $p < .001$

Table7 身長, 体重, BMI の平均値, 標準偏差および分散分析の結果 (女子)

	早熟群		中間群		晩熟群		
	平均	(SD)	平均	(SD)	平均	(SD)	
身長(cm)	155.56	(4.95)	155.18	(5.56)	153.93	(5.39)	晩熟<早熟*
体重(kg)	50.15	(6.91)	47.06	(7.71)	42.66	(5.82)	晩熟<中間<早熟***
BMI	20.80	(2.90)	19.56	(3.01)	17.96	(2.16)	晩熟<中間<早熟***

*: $p < .05$, ***: $p < .001$

男子については、晩熟群は「背が低いこと」を気にしており、中間群は「太っていること」を気にしている。容姿に関する意識や行動では、「髪型が決まらないうと学校に行きたくない」「一日なんども鏡を見る」「ふだんの服装には気を付けている」の3項目で晩熟群よりも中間群や早熟群の得点が高く、早熟群が外見をより意識しているようである。

女子では、「背が高いこと」「太っていること」「スタイルがよくないこと」を気にする程度については晩熟群よりも中間群、早熟群の得点が高かった。また容姿に関する意識や行動では、「ダイエットをしたことがある」「ダイエットに興味がある」「ダイエットしても長続きしない」など、ダイエットに関する項目では、晩熟群よりも中間群、中間群よりも早熟群の得点が高かった。しかし、「髪型が決まらないうと学校に行きたくない」「ふだんの服装には気を付けている」など容姿を意識することについては、中間群が最も得点が

低く、ダイエットに関する項目の結果に違いがみられた。

(2) 抑うつ傾向と自己評価

分散分析の結果、有意差がみられた項目の平均値、標準偏差および分散分析の結果を Table10・11に示した。

男子は、抑うつ傾向については、「ゆううつだと感じる」「みんながよそよそしいと思う」「過去についてよくよ考える」で、晩熟群よりも早熟群や中間群の得点が高かった。晩熟の青年の方が抑うつ気分を感じていないようである。また全体的自己価値、具体的側面の自己評価についても早熟群と晩熟群の間にほとんど差がみられず、従来指摘されていたような晩熟の青年は低い自己像を持ちやすく、適応上の問題が生じやすいという結果はみられなかった。

一方女子は、抑うつ傾向について、有意差がみられ

Table8 外見に関して早熟群・中間群・晩熟群で有意差のみられた項目（男子）

項目	早熟群	中間群	晩熟群	分散分析の結果	
	平均値 (SD)	平均値 (SD)	平均値 (SD)		
外見を気にする程度	背が低いこと	2.36 (1.71)	3.15 (1.93)	3.27 (1.95)	早熟<晩熟*
	太っていること	2.39 (1.87)	2.75 (1.80)	1.78 (1.32)	晩熟<中間**
容姿に関する意識や行動	髪型が決まらないと学校に行きたくない。	1.76 (1.16)	1.98 (1.41)	1.30 (0.79)	晩熟<中間***
	一日になんども鏡を見る。	2.22 (1.36)	1.84 (1.37)	1.43 (0.80)	晩熟<早熟**
	ふだんの服装には気がつかっている。	3.32 (1.70)	3.50 (1.73)	2.44 (1.51)	晩熟<中間=早熟***

*: $p<.05$, **: $p<.01$, ***: $p<.001$

Table9 外見に関して早熟群・中間群・晩熟群で有意差のみられた項目（女子）

項目	早熟群	中間群	晩熟群	分散分析の結果	
	平均値 (SD)	平均値 (SD)	平均値 (SD)		
外見を気にする程度	背が高いこと	1.62 (1.01)	1.84 (1.31)	1.50 (1.07)	晩熟<中間***
	太っていること	4.09 (1.61)	3.86 (1.66)	3.10 (1.70)	晩熟<中間=早熟**
	スタイルがよくないこと	4.03 (1.66)	3.94 (1.49)	3.49 (1.70)	晩熟<中間=早熟**
容姿に関する意識や行動	ダイエットをしたことがある。	3.01 (1.81)	2.19 (1.60)	1.78 (1.37)	晩熟=中間<早熟***
	ダイエットに興味がある。	3.70 (1.85)	3.12 (1.77)	2.59 (1.79)	晩熟<中間<早熟***
	ダイエットをしても長続きしない。	3.76 (1.88)	3.21 (1.94)	2.47 (1.89)	晩熟<中間<早熟***
	体型を改善するために、運動や筋力トレーニングをしている。	3.18 (1.78)	2.56 (1.54)	2.67 (1.71)	中間=晩熟<早熟**
	髪型が決まらないと学校に行きたくない。	2.77 (1.86)	2.25 (1.54)	2.79 (1.74)	中間<早熟<晩熟**
ふだんの服装には気がつかっている。	4.40 (1.32)	3.88 (1.56)	4.08 (1.58)	中間<早熟*	

*: $p<.05$, **: $p<.01$, ***: $p<.001$

たのは、「いろいろなことに不満がある」「何をするのも面倒だ」「ふだんはなんでもないことがわずらわしい」「怒りっぽくなった」といった項目であった。いずれも晩熟群よりも中間群や早熟群の得点が高かった。また「なかなか寝付けぬ」「夜眠れない」といった生活リズムの変調の項目で、晩熟群よりも中間群、早熟群の得点が高かった。中間群や早熟群にくらべて、晩熟群は抑うつ傾向が低いようである。また全体的自己価値、具体的側面の自己評価については、男子同様に早熟群と晩熟群の間にほとんど差がみられなかった。

(3) 規則違反と問題行動

分散分析の結果、有意差がみられた項目の平均値、標準偏差および分散分析の結果を Table12・13に示した。

男子では、「制服の形を崩して着ている」「学校に禁

じられているものを持っていく」という規則違反に関する項目では、晩熟群、中間群に比べて、早熟群の得点が高かった。「自転車やバイクを盗んだこと」「スーパーやコンビニなどで万引きしたこと」など盗みに関する問題行動、「タバコを吸ったこと」や「酒を飲んだこと」など、喫煙・飲酒に関する問題行動についても、晩熟群・中間群に比べて、早熟群の中学生はより多く報告していた。早熟群の問題行動が多いようである。

一方女子では、規則違反については、「学校に禁じられているものを持っていく」の1項目で、晩熟群に比べて、中間群、早熟群の得点が高かった。問題行動についても有意差がみられたのは、「家の中のお金を無断で持ち出したこと」1項目のみであった。女子は思春期的変化の時期で問題行動にあまり差はみられないようである。

Table10 抑うつ傾向と自己評価に関して早熟群・中間群・晩熟群で有意差のみられた項目（男子）

抑うつ傾向	抑うつ気分	ゆううつだと感じる。	1.59 (0.93)	1.47 (0.95)	1.23 (0.60)	晩熟<早熟*
	抑うつ気分	みんながよそよそしいと思う。	1.30 (0.66)	1.47 (0.85)	1.20 (0.57)	晩熟<中間*
		過去についてよくよ考える。	1.84 (0.99)	2.05 (1.07)	1.66 (0.90)	晩熟<中間*
全体的自己価値		なし				
スポーツ能力の自己評価	スポーツの大会では選手に選ばれる方である。	3.49 (1.46)	2.92 (1.50)	3.00 (1.59)	晩熟=中間<早熟*	

*: $p<0.05$

Table11 抑うつ傾向と自己評価に関して早熟群・中間群・晩熟群で有意差のみられた項目（女子）

抑うつ傾向	抑うつ気分	いろいろなことに不満がある。	2.46 (1.12)	2.53 (1.10)	2.21 (1.11)	晩熟<早熟*
	抑うつ気分	何をしても面倒だ。	2.27 (1.13)	2.43 (1.06)	2.13 (1.11)	晩熟<中間*
	抑うつ気分	ふだんはなんでもないことがわずらわしい。	1.72 (0.94)	1.69 (0.87)	1.46 (0.81)	晩熟<中間=早熟*
	抑うつ気分	怒りっぽくなった。	2.18 (1.05)	1.97 (1.02)	1.85 (1.05)	晩熟<早熟*
	生活リズムの変調	なかなか寝つけない。	1.86 (1.08)	1.81 (1.09)	1.53 (0.80)	晩熟<中間=早熟**
生活リズムの変調	夜眠れない。	1.70 (1.01)	1.62 (1.02)	1.38 (0.74)	晩熟<早熟**	
全体的自己価値		なし				
知的能力の自己評価	わからないことが多くて、宿題をなかなか終わらせられない。	2.90 (1.40)	3.33 (1.40)	3.11 (1.41)	早熟<中間*	
外見の自己評価	自分の体重は今のままで十分だと思っっている。	2.83 (1.63)	3.04 (1.57)	3.61 (1.60)	早熟=中間<晩熟***	

*: $p<0.05$, **: $p<0.01$, ***: $p<0.001$

Table12 規則違反と問題行動に関して早熟群・中間群・晩熟群で有意差のみられた項目（男子）

規則違反	制服の形を崩して着ている。	2.00 (1.22)	1.55 (0.96)	1.46 (0.91)	晩熟=中間<早熟*
	学校に禁じられているものを持っていく。	1.84 (1.26)	1.31 (0.76)	1.22 (0.68)	晩熟=中間<早熟**
問題行動	自転車やバイクを盗んだこと。	1.22 (0.71)	1.03 (0.25)	1.03 (0.22)	晩熟=中間<早熟*
	スーパーやコンビニなどで万引きしたこと。	1.35 (0.82)	1.06 (0.35)	1.04 (0.28)	晩熟=中間<早熟**
	タバコを吸ったこと。	1.54 (1.02)	1.13 (0.52)	1.12 (0.49)	晩熟=中間<早熟**
	酒を飲んだこと。	1.65 (1.09)	1.31 (0.79)	1.22 (0.66)	晩熟<早熟*
	シンナーや薬物などを吸引したこと。	1.03 (0.17)	1.14 (0.59)	1.00 (0.00)	晩熟<中間*

*: $p<0.05$, **: $p<0.01$

Table13 規則違反と問題行動に関して早熟群・中間群・晩熟群で有意差のみられた項目（女子）

項目	項目	早熟群	中間群	晩熟群	分散分析の結果
		平均値 (SD)	平均値 (SD)	平均値 (SD)	
規則違反	学校に禁じられているものを持っていく。	2.04 (1.14)	1.96 (1.11)	1.66 (0.99)	晩熟<中間=早熟**
問題行動	家の中のお金を無断で持ち出したこと。	1.18 (0.55)	1.20 (0.66)	1.06 (0.34)	晩熟<中間*

*: $p<0.05$, **: $p<0.01$

【考察】

本研究の目的は、早熟の中学生と晩熟の中学生にどのような心理的特徴、行動的特徴がみられるのかを比較検討することであった。

外見への意識や行動については、男子は早熟者の方が「一日になんども鏡を見る」など日常的に容姿を気にする行動をより多くしていた。思春期変化に伴って、外見を意識するようになり、容姿を気にする行動が増加することが示唆される。一方、女子は早熟者の方がダイエットをし、自分の容姿を変えようとする傾向がうかがわれた。また「髪型が決まらなないと学校に行きたくない」「ふだんの服装には気がつかっている」など容姿を意識することについては、中間群が最も得点が低かった。これは、中間群は多くの青年が思春期的変化を経験している時期に、思春期的変化を経験した群で「多くの青年と同じ」であり、他の青年と比較して外見に意識が向かうことが少なかったためではないだろうか。逆に早熟群や晩熟群は、他の青年がまだ経験していないときに思春期的変化をむかえる、あるいは多くの青年が思春期的変化を経験した後で経験するため、「他の青年と異なる」点に意識が向かい、外見を気にする程度が高くなる可能性が考えられる。

従来は、抑うつ傾向、自尊感情やボディイメージについて早熟者と晩熟者で違いがみられ、晩熟の男子と早熟の女子は心理的適応についてリスクがあると考えられてきた。しかし本調査では、男子については、抑うつ傾向については晩熟群の方が低く、また全体的自己価値については晩熟の男子と早熟の男子に差がみられず、晩熟の男子に心理的適応にリスクがあるという見解は支持されなかった。一方、女子については、中間群や早熟群は、寝付けない、食欲がないなど生活リズムの変調や抑うつ気分をより多く報告していた。従来の研究で指摘されていたように、早熟者は抑うつ状態を示し、心理的適応にリスクがみられる可能性が示された。

また従来の研究では男女とも早熟の青年がより飲酒、喫煙や学校での問題行動、性的問題行動に従事しやすいことが指摘されてきた。本調査の結果で男子の早熟者は、従来の研究で指摘されてきたように、学校での規則違反や盗み、飲酒、喫煙の問題行動をより行ないやすい傾向がみられた。しかし女子の早熟者は、盗み、性的行動、飲酒、喫煙などの問題行動については、こうした傾向はみられなかった。

本研究の結果から、思春期的変化は、男女とも外見

への意識に変化を与え、男子の早熟は外的な問題行動と、抑うつなどの内的な問題行動の両方に影響を与え、女子の早熟は内的な問題行動に影響を与えている可能性が示唆された。

【文献】

- 1) Jones, M., & Mussen, P. Self-conceptions, motivations, and interpersonal attitudes of late- and early-maturing girls. *Child Development*, 29, 491-501 (1958).
- 2) Mussen, P., & Jones, M. Self-conceptions, motivations, and interpersonal attitudes of late- and early-maturing boys. *Child Development*, 28, 243-256 (1957).
- 3) Richards, M., & Larson, R. Pubertal development and the daily subjective states of young adolescents. *Journal of Research on Adolescence*, 3, 145-169 (1993).
- 4) Duncan, P., Ritter, P., Dornbusch, S., Gross, R., & Carlsmith, J. The effects of pubertal timing on body image, school behavior, and deviance. *Journal of Youth and Adolescence*, 14, 227-236 (1985).
- 5) Andersson, T., & Magnusson. Biological maturation in adolescence and the development of drinking habits and alcohol abuse among young males: A prospective longitudinal study. *Journal of Youth and Adolescence*, 19, 33-42 (1990).
- 6) Wichstrom, L. The impact of pubertal timing on adolescents' alcohol use. *Journal of Research on Adolescence*, 11, 131-150 (2001).
- 7) Simmons, R. & Blyth, D. *Moving into adolescence*. New York: Aldine de Gruyter (1987).
- 8) Ge, X., Kim, i., Brody, G., Conger, R., Simmons, R., Gibbons, F. It's about timing and change: pubertal transition effects on symptoms of major depression among African American youths. *Developmental Psychology*, 39, 430-439 (2003).
- 9) Dich, D., Rose, R., Pulkkinen, L., & Kaprio, J. Measuring puberty and understanding its impact: A longitudinal study of adolescent twins. *Journal of Youth and Adolescence*, 30, 385-400 (2001).
- 10) 日野林俊彦・南徹弘・赤井誠生・山田一憲・糸川直祐 発達加速現象の研究・その18—2002年における発達勾配現象の分析— 日本心理学会第68回大会発表論文集, 1132 (2004).

【付記】

本調査は、科研費・基盤研究(B)(1)14310055(研究代表者:氏家達夫,研究分担者:二宮克美,五十嵐敦,井上裕光)の補助をうけ実施された。本論文は,平成14年度~平成17年度科学研究費補助金基盤研究B(課題番号14310055)研究成果報告書「中学生の非行・反社会的問題行動に対する危険要因と防御要因についての縦断的検討」にて報告し,日本青年心理学会第12回大会において発表した内容を再分析したものである。

本調査の実施にあたり,調査にご回答いただいた中学生の皆さん並びに調査にご協力いただきました各中学校の先生方に心より感謝いたします。

また本調査の共同研究者であり,常日頃ご指導いただいている名古屋大学の氏家達夫先生,愛知学院大学の二宮克美先生,福島大学の五十嵐敦先生,千葉県立保健医療大学の井上裕光先生に厚く御礼申し上げます。

